

特集

システムを作業療法する —みんながイキイキする仕組み創り

編集担当 三瀬 和彦

地域移行支援に向けた 作業療法士の介入

梶原 幸信 ————— ●496

チーム連携に向けた 院内教育システムへの関わり

山田 太一 ————— ●501

高齢社会をデザインする

—作業療法士は必要か

久保田 好正, 他 ————— ●507

管理職としての作業療法経過記録

関谷 宏美 ————— ●512

品質マネジメントシステムを 活用したシーティング・クリニック の取り組み

岩谷 清一 ————— ●519

経営コンサルタントからみえる 作業療法の今後と具体的対策

三好 貴之 ————— ●525

烈闘 作業療法

みんなの“わくわく感”で地域おこし (野津 裕二郎さん)

————— ●488

お家を変えよう！

介護保険と住宅改修②

児玉 道子 ———— ●540

学校では習わないメソッド

「バリデーション」

—認知症者とのコミュニケーションのヒント

浅野 有子 ———— ●542

複眼で見る

マネジメント（management）について

浅野 有子 ———— ●548

作業療法士が創る嚥下障害へのリハアプローチ

在宅版嚥下評価スケールの試用と結果

寺本 千秋 ———— ●552

OTケアマネジャーはこうした！

私はずっとおしゃれでいたい

—Aさんからいただいた“気づき”と“学び”

三浦 晃，他 ———— ●557

らんどまーく

心豊かに生きるために

—今、「これから」の作業療法

吉田 幸文 ———— ●486

掘り起こせ“やる気” OT スコップ隊 認知症の人編

家族からみた認知症の症状（その2）

上城 憲司，他 ———— ●531

女性 OT ひとりで悩まないで

これまでの相談を振り返って

宇田 薫 ———— ●532

なんでもできる 100 均グッズ

脱半ケツ！するっとズボンエイド！

大森 啓誉，他 ———— ●534

勝手に OT 番付

東西横綱

仲地 宗幸，他 ———— ●536

OTとして私が大切にしていること

いきいきとした在宅生活が送れるように

—共に歩む作業療法とシームレスな支援

嵩山 泰志 ———— ●545

作業療法周辺のニュース ———— ●564

カメラマン川上哲也の見た世界 ———— ●目次前

書評 ———— ●570

総目次 ———— ●572

はじめのことば ———— ●巻頭頁

既刊案内 ———— ●569

インフォメーション ———— ●571

次号予告 ———— ●577

みんなの “わくわく感”で 地域おこし

野津 裕二郎さん

キャンパス東北
OT 6年目、神奈川県出身

2011年3月に東北・関東を襲った東日本大震災。牡鹿半島（石巻市）は、その震源に最も近い本土である。そこに、瓦礫だらけの平屋を改修しつくられた「おらほの家」。“俺たちの家”を意味する名前のとおり、その人らしさを大切にするコミュニティサロンである。それぞれがおしゃべりに興じたり、得意の手料理をふるまったり、庭でシソの世話をしたり…。自由でアットホームな空間が出来上がっている。

「これは、震災があるからという理由だけでやっているわけではないんです」と、中心人物の野津裕二郎さんは語る。復興支援事業として委託を受けてはいるものの、その活動は住民同士の絆、生き方への支援など、地域全体に向けられている。今後の展望も含め、じっくりお話を伺った。（編集室）



地域移行支援に向けた 作業療法士の介入

Yukinobu KAJIWARA

梶原 幸信

伊東市民病院

内容を理解するためのキーワード ● 地域連携 ● 診療報酬 ● 介護報酬

システムを作業療法する—みんながイキイキする仕組み創り

要 旨

リハ対象患者の退院支援においては、入院時に実施したリハをもとにした退院後生活環境整備や生活スケジュールの検討が重要である。OT は、関連する制度の理解とともに、施設内だけではなく、地域における他職種連携の遂行が求められる。退院に向けた連携において、退院時報告書など、書類のやりとりについては体制整備が進んでいるが、その記載内容や書類をやりとりし合う相互の役割の理解については、十分ではない場合も少なくない。本稿では、近年の制度改定で進められている地域生活移行に関連する制度の紹介とともに、地域連携に関与する OT の役割について考える。

はじめに

近年の制度改定では、入院期間の短期化とともに、地域移行支援体制の充実に向けた整備が進められている。対象者の地域生活においては、1 人ひとりの身体機能や生活動作の能力向上、介助量軽減だけではなく、対象者自身の主体性を重視することや、目標をより明確にしたうえでの計画、役割獲得や地域参加までの支援が求められてきている。

作業療法では、元より改善という概念の中で、「治す」だけではなく「できるようにする」ことも重視されている。障害部位の回復だけではなく、「利き手交換」や「自助具」といった言葉に代表されるように、活動の獲得に向けて広い視点で関わる役割を担っており、地域生活移行における支援計画立案時の関与は重要である。

本稿では、地域生活の支援体制が施設間や制度間の連携強化を中心に見直されてきている中で、

チーム連携に向けた 院内教育システムへの関わり

Taichi YAMADA

山田 太一

HITO 病院 リハビリテーション科

内容を理解するためのキーワード ●連携 ●若手スタッフ ●教育

要 旨

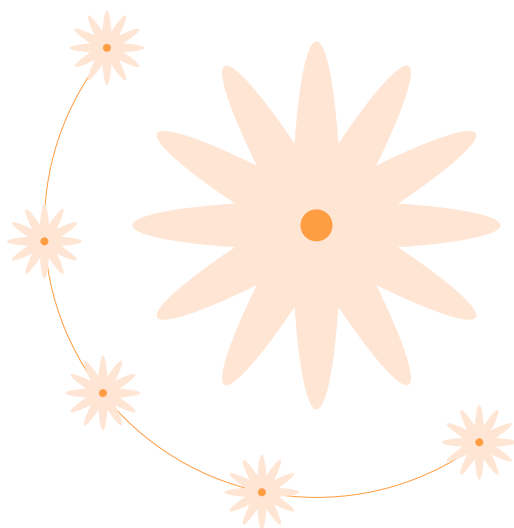
HITO 病院（以下、当院）のリハ科の特徴は、急性期から生活期までの継続したリハが提供可能であり、セラピストは、ローテーションによりすべての病期を経験できることである。5 年目以下の臨床経験の少ないスタッフが半数を占める当科では、チーム医療・連携強化において、退院後の生活を見据えた切れ目のないリハ提供ができるよう、各セラピストの個人能力の向上とスタッフのレベルに応じた組織体制の整備、組織力の向上に取り組む必要があった。

今回、その中でも院内教育システムや人事考課制度（チャレンジシート、キャリアラダーシステム、勉強会・業務管理表）、多職種との連携（病棟情報共有ツール、リハ事例検討会、リハ・ケア勉強会）を中心に当科の取り組みについて紹介する。

はじめに

当院は 2013 年度にオープンし、病床数 257 床（HCU〈high care unit〉10 床、急性期病棟 135 床、地域包括ケア病棟 45 床、緩和ケア病棟 17 床、回復期リハ病棟 50 床）をもち、リハの展開も急性期から在宅サービスにまで関わっている（図 1）。また、当院に社会福祉法人愛美会、医療法人健康会を加えた石川ヘルスケアグループは、超高齢化を迎える地域社会に向けて、「連携」をキーワードに「いきるを支える」医療・介護・福祉の実現を目指している（図 2）。

当院は、急性期から生活期までの継続したリハが提供可能で、セラピストはグループ内のローテーションにより、すべての病期を経験することができる。スタッフ数は 70 名（PT：38 名、OT：25 名、ST：7 名）、平均年齢は 28.9 歳、平均経験年数は 6.2 年で、5 年目以下のセラピストが 47.1%



高齢社会をデザインする —作業療法士は必要か

Yoshimasa KUBOTA

Mizuho YOSHIDA

久保田 好正^{*1}, 吉田 瑞穂^{*2}^{*1}(株) 斬新社, 作業療法士^{*2}(株) 斬新社 ソーシャルデイ ひと花, 作業療法士

内容を理解するためのキーワード ●イノベーション ●提供価値 ●ソーシャルデザイン

要 旨

課題先進国, 日本。今, 各地で起きている地域づくりなどソーシャルデザインの手法を用いた活動は, 作業療法の視点や考え方と共通点が多いにもかかわらず, OT はそこにいない。OT が自分たちの生き残りを考えて内向きになっているかぎり, 私たちの未来はない。まずは, 地域で何ができるか実践し, OT の価値を感じてもらうことが必要だ。

筆者は, 高齢社会を面白くするデザイン会社, 「(株)斬新社[®]」を設立した。生きがいづくりと社会参加に特化した「ソーシャルデイ ひと花」, 地域でリハの新しい実践をつくる「RehaBank[®]」などを展開している。

「高齢社会をデザインする」とは, 攻めの発想で, 時代や社会を「自分ごと」として捉え, 業界を超えた視野の広さ・深さを知り, 自らの強みと限界を知り, 仲間と一緒にほしい未来をつくることである。高齢社会の最前線にいる OT は, 何ができるか。今が, 分岐点である。

OT は地域に必要なか

① 課題先進国, 日本。すでに走る挑戦者たち。

課題先進国, 日本。2050 年, 私が 80 歳になる頃, 高齢者と若者の割合はほぼ 1 対 1 になる予測だ。2025 年, 団塊世代が後期高齢者となるまであと 10 年。カウントダウンが始まった。高齢社会とは他人ごとではなく, 自分の老後であり, 子どもたちに残す未来でもある。その最前線にいるみなさんは, 何を残すだろうか。

地域では, 課題を解決するさまざまな活動が始まっている。過疎地域の高齢者の自殺を減らしたいと始まった新潟県の「越後妻有アートトリエンナーレ 2012」¹⁾には, 48 万人が集まった。大雪や

管理職としての作業療法経過記録

Hironi SEKIYA

関谷 宏美

甲州リハビリテーション病院 リハビリテーション部, 作業療法士

内容を理解するためのキーワード ● 管理者の悩み ● 業務改善システム ● 発想の転換

要 旨

2025年の超高齢社会に向けたリハ専門職の増員により、各職場では、セラピストが管理者として業務改善やマネジメントを行うことが増加している。しかし、管理職としての専門教育を受けることのなかったセラピストは、役割の変更に戸惑うことが多いのではないだろうか。筆者は、管理職となった時、役割の変更に戸惑い、職場外での活動に参加した。そこでは、価値観と課題に対するアプローチの多様性に気づくとともに、病院のOTという自分の仕事の使命と制約に気がついた。これらをもとに職場内の課題解決に臨むことで、職場が組織化され、活動にシステムが構築されてきた。本稿では、システムを「業務改善の仕組み」と定義している。筆者が管理職として「自身への作業療法」と「職場への作業療法」を展開してきた経過を紹介し、若き管理職の一助となることを期待する。

スイミーの挑戦

絵本『スイミー—ちいさな かしこい さかなのはなし』（レオ・レオニ 著、谷川俊太郎 訳、好学社）をご存知の方は多いだろう。スイミーたち小さな魚が、皆で固まって泳ぐことで大きな魚のふりをして、恐い大魚を追い払う。赤い魚たちで体の形をつくり、唯一、黒い魚のスイミーは目の役を買って出た。

筆者は、管理職になって悩んでいた際、この物語の発想に大きなヒントを得た。そして、スイミーたちが形づくる“大きな魚”を“ビッグスイミー”として、こんな続編をしたためてみた。

「スイミーの挑戦」

大きな魚を追い出した“ビッグスイミー”は、雄大な海の世界を楽しんだ。
大きな魚がすべて凶暴なわけではない。

品質マネジメントシステムを活用したシーティング・クリニックの取り組み

Seiichi IWAYA

岩谷 清一

永生クリニック リハビリテーション科

内容を理解するためのキーワード ● システム構築 ● 品質マネジメントの 8 原則
● シーティング・クリニック

要 旨

病院や施設では、国家資格を有する多くの専門職が協働している。その中で、業務、人材育成、経営などについてさまざまなシステムが構築されている。わが国の保健・医療・福祉の諸施策の動きは、2025年の地域包括ケアシステムの構築に向けて加速しており、既存のシステムと新規のシステムとをどのように折り合いをつけて、より良いサービスに結びつけていくかが問題になっている。また、OTの提案が他職種に理解されずに悩んでいるとの声を少なからず聞く。本稿では、永生病院で12年間、実践しているシーティング・クリニック（以下、SC）（組織的な椅子・車椅子の適合サービス）の取り組みを紹介しながら、顧客満足の向上を目的とした国際規格ISO9001（品質マネジメントシステム）の土台となる「品質マネジメントの8原則」を取り上げ、OTが施設で仕組みをつくる際のコツについて述べる。

はじめに

筆者は、管理職になってから10数年が経つ。振り返れば、いろいろな仕組みをつくってきた。現在でも、自分の提案を相手に理解してもらうにはどうしたらいいだろうか、つくった仕組みを継続し発展させるにはどうしたらいいだろうかと日々模索している。従来の仕組みからつくられた習慣や価値観を変えることは、とても難しい作業である。

筆者は前職で、トイレタリー製品の研究開発に6年間携わった。より質の高いサービスを顧客に提供していこうとする点では、製造業界も医療業界も同じである。今回、仕組みづくりの仕掛けとして、製造業などで用いられている「品質マネジメントシステム」の活用を提案したい。このシス

経営コンサルタントからみえる 作業療法の今後と具体的対策

Takayuki MIYOSHI

三好 貴之

(株) メディックプランニング, 作業療法士

内容を理解するためのキーワード ● 病棟配置 ● チーム医療 ● 在宅復帰

要 旨

団塊の世代が後期高齢者となる 2025 年に向けて、診療ならびに介護報酬制度における作業療法の重要性は増している。医療機関では、重症患者の増加、在宅復帰の促進のために、疾患別リハ提供以外にも入院中の ADL 管理、退院支援など病棟配置による作業療法の提供が進んでいる。また、介護施設では、2015 年度介護報酬改定にて、活動と参加へのアプローチが推進され、OT が従来行ってきた生活行為向上リハが注目されている。

このような激変する作業療法現場に対し、まず時代の変遷をもとに、制度政策が OT に何を求めているかを明確にするために、「高齢者リハビリテーションのあるべき方向」「高齢者の地域におけるリハビリテーションの新たな在り方検討会」の内容を踏まえて検討する。そして、急性期病床、地域包括ケア病棟、回復期リハ病棟、介護施設とステージごとの作業療法現場に対する業務改善の方向性と具体策について提案する。

作業療法をとりまく時代の変遷

筆者は、現在、急性期病院から介護施設まで多数の法人に対し、経営コンサルティングを行っている。その内容は多岐にわたるが、OT 出身のコンサルタントとしてクライアントから依頼されるのは、「リハ機能の強化」と「人材育成」の 2 点である。これら 2 点を法人の中で展開し、最終的に収益に結びつけていくのが筆者の仕事である。そして、コンサルティングにおいて非常に重要なのは、「作業療法の将来を見据えた方向性」に基づいた現場の業務改善である。最近、筆者に対し多くの病院、介護施設の経営者から「OT はこれから経営にとっても、患者や利用者にとっても絶対に欠かせないものだ」という意見を多くもらうように

東西横綱



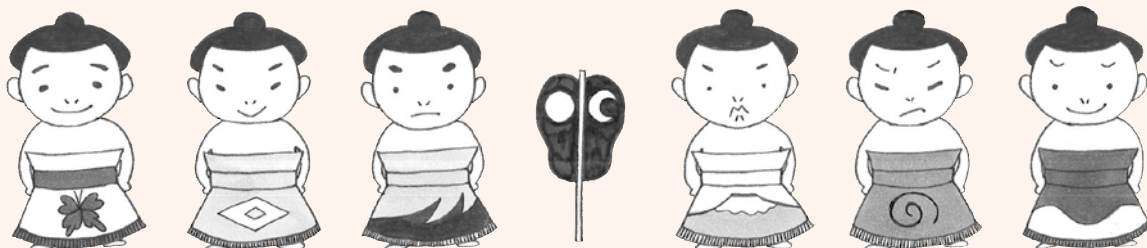
【全日本 OT 横綱審議委員会】

仲地 宗幸

(株) NSP キングコング)

坂本 将吏

(NPO 法人ちゅらゆい コミュット！)



これまで、この企画を支えてくださった皆様にお知らせがございます。今回は横綱同士の取り組みを紹介しますが、これ以上の番付はもちろん存在しません。ということは、ということは——そう、最終回なのです。とても寂しい思いもありますが、このような企画を約 1 年にわたり掲載していただきました『臨床作業療法』編集部に感謝の想いで一杯です。人気だったのか不人気だったのかもよく分かりませんが、2 度程「横綱審議委員会の仲地さんですよ」と声をかけられ、とても嬉しかったです。

この企画は、心（作業療法に対する熱い情熱）、技（具体的な実践）、体（ルックス）という側面から勝手に OT を番付するという、なんとも失礼な試みでした。しかしそれも、熱い想いをもって実践している OT をもっと皆に知ってもらいたいという、われわれの切なる思いそのものを形にしたらこうなったということです。誰が上とかではなく、楽しみながら OT の仲間を知っていただけたら幸いです。

それでは、心・技・体、そして横綱としての品

格を兼ね備えた東西両力士を紹介しましょう。両横綱とも非常に謙虚で、品格を感じます。



ゴリラ部屋

【西横綱 沖ノ海】

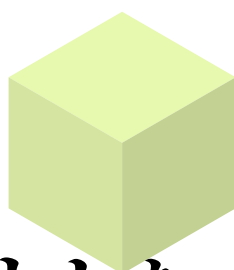
木下 匠

(沖縄県、(株)NSP 就労移行支援事業所 GoRiIla)



さー、まずは西の横綱の土俵入りです。彼は、とにかくカッコいいということで女子から人気です。同じ男性なら誰しも一度は嫉妬するであろう存在です。しかし、ただ単にカッコいいだけではなく、とにかく当事者と関係性を築くのがうまい！ 幅広い周波数を持ち、いかなる人に対しても丁寧に接し、関係をつくり、大切な思いを共有して支援につなげています。当事者の周りや関係機関との調整などにおいても、緻密なマ

OTとして 私が 大切にしていること



いきいきとした 在宅生活が送れるように —共に歩む作業療法とシームレスな支援

紀和病院 訪問リハビリテーション

寄山 泰志

学生時代、地域作業療法学の講義で、地域リハの定義について「住み慣れたところで一生、安全にいきいきとした生活が送れるように支援すること」と学び、感銘を受けました。私は急性期病院で5年勤務したのち、訪問作業療法に従事して現在、6年目を迎えています。今回は、対象者、家族が住み慣れたところで、幸せにいきいきとした在宅生活が送れるように支援するときに大切にしている“共に歩む作業療法”と、現在取り組んでいる“シームレスな（途切れのない）支援”について書かせていただきました。ご覧いただけましたら幸いです。

OT “共に歩む作業療法”を初めて学んだ時

精神科病院の臨床実習で、指導者からカナダ作業療法によるクライアント中心の作業療法について学びました。カナダ作業療法では、“クライアントは自分自身の専門家、OTは作業を支援する専門家であり、クライアントの希望を聴取し、目標に向かって対等な立場で知恵を出し合い、人—環境—作業という視点で考え、共に協力し歩んでいくことが重要である”といわれています。

臨床実習で担当した対象者から、「退院して1人暮らしをしたい」と希望がありました。目標は「退院して1人暮らしをすること」とし、1人暮らしができるようになるためにはどんなことが必要なのか、2人で知恵を出し合いました。結果、プログラムは、対象者から「1人暮らしでは疲れているときがあるだろうから、手軽に料理できる能力を習得したい」というおもいがあり、「レタスチャーハン作り」を計画し、材料の買物と調理をしました。実習終了時、「1人暮らしをする自信が少したったよ」と、対象者から言葉をいただき、私はOTという職業と出会い、本当に良かったと心の底から思いました。

複眼で見る

マネジメント (management) について

● 介護老人保健施設 涼風苑, 認定作業療法士
● 茨城県ケアマネジャー協会 副会長, 主任介護支援専門員

浅野 有子

▶ マネジメントとは

マネジメント (management) とは、経営学上では経営管理のことをさす。事業を適切に運営し、その目的を達成するための管理・運営をさす言葉だ。一般的には、“目標・目的を達成するために必要な要素を分析し、成功するために手を打つこと”をさす。

私たちも、組織の一員としてリハ部門のマネジメントの一端を担っている。管理的立場にある方は、まさに日々マネジメント力が問われている。OTとしての個々人も自身の仕事をマネジメントできているかどうかで成果に大きな差が出る。専門職としての力量の基となろう。

介護保険の導入以来、介護支援専門員（ケアマネジャー）という専門職が誕生し、地域で高齢者を中心に生活支援を担い発展している。そして、新しい流れの中で、今 OT にはリハビリテーションマネジメントが求められている。

▶ ドラッカーから学ぶ

マネジメントというと、ピーター・F・ドラッカー^{*1}の言葉がいつも引用される。彼はその著書『チェンジ・リーダーの条件』(P.F.ドラッカー〈著〉, 上田惇生〈編訳〉『チェンジ・リーダーの条件—みずから変化をつくりだせ!』ダイヤモンド社, 2000)の中で、マネジメントの機能・重要性を以下のように述べている。

*筆者により一部割愛, () 内のつぶやきを加筆。

1. 人の強みを発揮させ、その弱みを無効にする（それこそエンパワーメント、リハビリテーション）。
2. 国や地域の伝統・歴史・文化を背景とし、環境に関わる（環境因子はICF〈国際生活機能分類〉でも重要視されている）。
3. 組織の目的・価値観・目標を明確にし、周知徹底し、常時確認していくこと（リハ理念、作業療法のポジションが重要）。
4. 組織・チームの構成員を成長させること、人材育成に関わること（生涯教育・専門職としてのOJT〈on the job training〉・Off-JT〈off the job training〉が大切）。

作業療法士が創る
嚥下障害への
リハアプローチ

在宅版嚥下評価 スケールの 試用と結果

紀州リハビリケア訪問看護ステーション

作業療法士 寺本 千秋

第5回

はじめに

前回の本コラムでは、「できる状況」と「している状況」を数的指標で定量化できる従来の嚥下機能評価に加え、生活状況や家族を対象とした評価も含めた、感度の高い評価スケールが必要である

ことを述べ、主観的評価である「視覚的評価スケール」(visual analogue scale)や質問形式(コメント記載)を用いた、質的評価に着目した「在宅版嚥下評価スケール」を紹介した。

今回は、この「在宅版嚥下評価スケール」を用い、多職種が協働で行った嚥下往診や訪問看護・

作業療法では、摂食環境である車椅子とベッド上の姿勢調整を行った

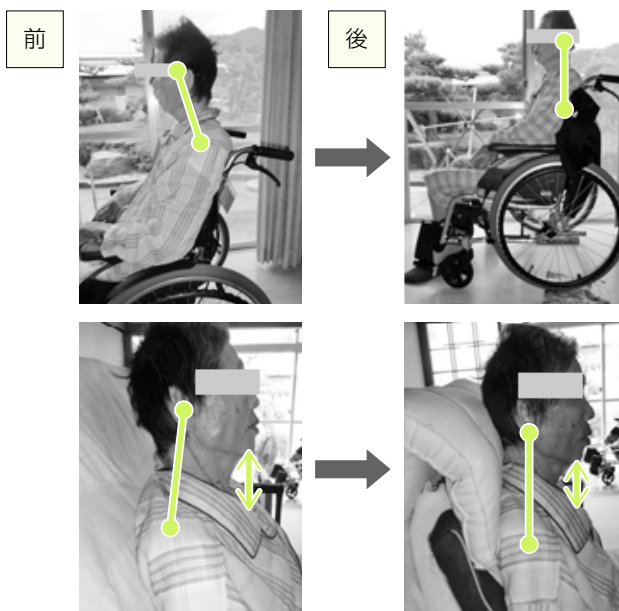


図1 ◆車椅子とベッド上での姿勢調整

OTケアマネジャーは こうした！

私はずっとおしやれでいたいの
— Aさんからいただいた「気づき」と「学び」

三浦 晃*

大塚 英樹**

丸子 佐和子**

*介護老人保健施設 せんだんの丘、支援相談員、作業療法士
 **指定居宅介護支援事業所 せんだんの丘、介護支援専門員、
 作業療法士

筆者のスーパーバイザー、Aさん

写真の中の A さんは、優しく微笑みかけています。今日もご主人は 2 人分の食事を作り、写真と向き合いながら食べているそうです。ご主人曰く、「これが毎日の習慣」とのこと。存在する世界を超えて、夫婦の絆を大切にされていることに、またひとつ、意味のある作業と人間の奥深さを教えていただきました。

Aさんは、筆者のスーパーバイザーです。とはいっても、AさんはOTではありません。でも、誰よりも作業療法の大事さに、そして意味のある作業の大事さに気づかせてくれた方でした。それゆえ、筆者が勝手にスーパーバイザーと決めているのです。それも、OTという域を超え、人生レベルのそれとして。

さて、連載6回目、筆者にとって2回目の執筆となる今回は、“意味のある作業の気づき編”としてのエピソードを綴らせていただきます。第12巻3号では、“試行錯誤のマネジメント実践：通所リハ編”といった内容を綴らせていただきました。今回はその数年前の話で、筆者が支援相談員として駆け出しの頃に遡ります。Aさんとのエピソードが、今日のマネジメント実践につながっているなあと思いつつ、ふと、こんな矛盾を思ったりもします。少しは「意味のある作業」の大事さを知った今、また、Aさんの支援をさせていただけないだろうか…と。

Aさんの紹介

Aさんは故郷で学生時代を過ごし、大手企業に就職。20歳代後半で結婚し、ご長男を儲けました。結婚後は専業主婦となり、優しい母として、そして妻として内助の功により家庭を支え続けました。大学教授であり研究者であるご主人はとにかく多忙で、家族水入らずの時間は少なかったようです。また、ご主人の海外赴任のため、一家で数年間イギリス暮らしをしたこともありました。